

2025年4月8日

第649回地方財政研究会

共生と再分配の理論的考察：
外部性の視点から

日本社会事業大学

横山彰

目次

1. はじめに
2. 外部性分析の広がり
3. 共生を考える
4. 共生・共存・共感：外部性の視点から
5. 再分配の私的動機付け
6. おわりに

1. はじめに

【本報告の目的】

いま日本では、社会福祉が「地域共生社会」の概念枠組みの中で検討されている。この基礎にある「共生」と、社会福祉の基礎にある「再分配」の私的動機付けについて、外部性の視点から理論的に考察することが、本報告の目的である。

【他者と外部性】

人間は、いつも他者と共にあり、共に生きていかざるをえない。他者の諸活動によって、自分の生に関する目標（利得・効用・厚生・幸福・正義・自由など）が左右される。

⇒他者の存在がもたらす外部性

地域共生社会とは

制度・分野ごとの『縦割り』や「支え手」「受け手」という関係を超えて、

地域住民や地域の多様な主体が参画し、人と人、人と資源が

世代や分野を超えてつながることで、住民一人ひとりの暮らしと生きがい、地域をともに創っていく社会を指しています。



出所: 厚生労働省「地域共生社会のポータルサイト」

<https://www.mhlw.go.jp/kyouseisyakaiportal/> (2025.4.6 最終閲覧)

⇒「地域共生社会」でいう「共生」とは？

制度・分野ごとの『縦割り』や「支え手」「受け手」という関係を超えて、地域住民や地域の多様な主体が参画し、人と人、人と資源が世代や分野を超えてつながることで、住民一人ひとりの暮らしと生きがい、地域をともに創っていく社会を指しています。

⇒「私たちは、いつも何らかの意味で『他者』と『共にあり、共に生きる』存在であるといえる。」(笠井・工藤, 2020: 63)

⇒「人間は他者と交わり、友好的であれ敵対的であれ、共に生きていかざるをえない。」(竹本, 2020:18)

2. 外部性分析の広がり

(1) 外部性の定義

ある経済主体の活動が、その活動に直接係わらない第三者である他の経済主体に影響を及ぼす効果

(2) 外部性をめぐる議論

① 外部性の概念・分類

金銭的外部性と技術的外部性、外部経済と外部不経済、
一方的外部性と相互的外部性、空間的外部性と通時的外部性、
分配の外部性と政治の外部性(政策の外部性)

② 外部性分析の汎用

③ 外部性の問題解決

④ 外部性の計測

(3) 政策の外部性

【定義】

ある政府単位の公共政策決定が、その決定に反対の主体や、その決定に関与しない主体に影響を及ぼす効果

【政治の失敗としての外部性】

- ① 分配の外部性と政治の外部性
- ② 空間的外部性と通時的外部性
- ③ 財政外部性
 - ・ スピルオーバー効果
 - ・ 租税外部性
- ④ 政策の相互依存性
- ⑤ 政策過程における外部性

3. 共生を考える

共生の意味づけ＝そもそも共生とは何か

(1) 共生の辞書的意味(広辞苑第六版)

「①ともに所を同じくして生活すること。②[生]異種の生物が行動的・生理的な結びつきをもち、一所に生活している状態。・・・」

(2) 共生の英語表現

symbiosis, conviviality, coexistence, living together

⇒ 英語の辞書的意味 (Oxford English Dictionary Online)*

* 以下の英語の辞書的意味は、すべて Oxford English Dictionary Online による。

① symbiosis

Etymology: modern Latin, < Greek συμβίωσις a living together, companionship, < συμβιοῦν, συμβιόειν to live together, < σύμβιος adjective, living together, noun, companion, partner, < σύν sym- prefix + βίος life.(Show Less)

1. Living together, social life.

2.a. Biology. Association of two different organisms (usually two plants, or an animal and a plant) which live attached to each other, or one as a tenant of the other, and contribute to each other's support. Also more widely, any intimate association of two or more different organisms, whether mutually beneficial or not.

② conviviality

Etymology: formed as convivial adj. + -ity suffix.

- a. The quality of being convivial; the enjoyment of festive society, festivity; (of persons) convivial spirit or disposition.
- b. plural. Convivial practices, festivities.

⇐ convivial

Etymology: < Latin convīviālis pertaining to a feast, < convīvium feast; compare modern French convivial .

- 1. Of or belonging to a feast or banquet; characterized by feasting or jovial companionship; such as befits a feast, festive.
- 2. Fond of feasting and good company, disposed to enjoy festive society; festive, jovial.

③ coexistence

Etymology: < co- prefix + existence n.;

- a. Existence together or in conjunction.
- b. With special reference to peaceful existence side by side of states professing different ideologies.

⇐ coexist

Etymology: < co- prefix + exist v.;

- a. intransitive. To exist together or in conjunction; to exist at the same time, in the same place, etc., with (rarely †to, †unto) another.
- b. Of political or economic systems (see coexistence n.).

(3) 日本の共生論における共生の意味

現代日本における共生理念の3類型(尾関, 2002)

- ・聖域的共生論(黒川, 1987; 1991; 1996)
- ・競争的共生論(井上・名和田・桂木, 1992; 2005)
- ・共同的共生論(尾関, 1995; 2002)

①聖域的共生論(黒川, 1991: 97)

「共生の思想はお互いの聖域を認めようとする思想」

②競争的共生論(井上・名和田・桂木, 1992: 59)

「リベラリズムの根本理念は、異質で多様な自律的人格の共生」

③ 共同的共生論（尾関, 2002: 19）

「・・・真の共生を実現するためには、配分的正義の観点から、弱者と強者の間の実質的平等の追求が不可欠であり、弱者の共同と社会的連帯による競争主義への対抗をも含み込むような『共生』理念が重要と思われるのである。

こういった〈共同性〉を基礎にする共生理念を、私なりに『共同的共生』理念と呼びたいと思う。」

⇒黒川(1996:6-7)は、調和・共存・妥協といった類似語との違いとして、次のように述べている。

- 共生とは対立、矛盾を含みつつ競争、緊張の中から生まれる新しい創造的な関係をいう。
- 共生とはお互いに対立しながらも、お互いを必要とし、理解しようとするポジティブな関係をいう。
- 共生とは、いずれの片方だけでは不可能であった新しい創造を可能とする関係をいう。
- 共生とは、お互いのもつ個性や聖域を尊重しつつ、お互いの共通項を広げようとする関係である。
- 共生とは、与え・与えられる大きな生命系のなかに自らの存在を位置づけるものである。

⇒井上・名和田・桂木(1992:24-26)

「生態学的均衡としての『共生』、すなわち、『共棲(symbiosis シンビオーシス)』は、…閉じた共存共栄のシステムである。」(p.24)

「…我々のいう<<共生>>とは、異質なものに開かれた社会的結合様式である。それは、内輪で仲よく共存共栄することではなく、生の形式を異にする人々が、自由な活動と参加の機会を相互に承認し、相互の関係を積極的に築き上げてゆけるような社会的結合である。Symbiosis をモデルとする[共生]概念と区別するために、英語で表記するなら、conviviality(コンヴィヴィアリティ)という言葉がふさわしい。」(p.25)

「●註…この言葉…の日常的意味は『宴』である。…『宴』と言っても、…オープン・ハウス・パーティー…が、我々の<<共生>>理念に比較的近い。そこでは、所属も背景も利害関心も異にする多様な人々が、出逢いを求めて集う。…各人が互いに相手を、自分とは異なる独自の観点をもった自律的人格として尊重し配慮しあう作法が、このような集いを支配する。」(pp.25-26)

⇒ ⇒ Illich (1973)、金(2009)、笠井・工藤(2020:1-12)も参照のこと

⇒井上(2005:23-26)は、2つの「共生」観として
symbiosisとconvivialityの違いを指摘する。

「共生を意味する英語表現にはギリシャ語源の symbiosis とラテン語源の conviviality
があり、・・・symbiosisは、異質な存在者が生存利害の相互依存性により共存する関
係である。・・・これにたいし、conviviality・・・宴の参加者たちの共存を可能にしている
のは、実質的利害や参加目的の共通性・相互依存性ではなく、品位(decency)をもつ
て他者を接遇する仕方を律する共通の社交の作法である。」(p.24)
「symbiosis と conviviality と・・・には以下のような重要な相違がある。」(p.25)

symbiosis

閉鎖的

静的 (static)

手段的 (instrumental)

conviviality

開放的

動的 (dynamic)

自己目的的 (consummatory)

(注) 上記の対比表記は横山による。

⇒ Illich (1973:11)

“I choose the term ‘conviviality’ to designate the opposite of industrial productivity. I intend it to mean autonomous and creative intercourse among persons, and the intercourse of persons with their environment; . . .

I consider conviviality to be individual freedom realized in personal interdependence”

コンヴィヴィアリティ

「産業主義的な生産性の正反対を明示するのに、私は自立共生という用語を選ぶ。私はその言葉に、各人のあいだの自立的で創造的な交わりと、各人の環境との同様の交わりを意味させ、... 私は自立共生とは、人間的な相互依存のうちに実現された個的自由...であると考える。」(邦訳, 1989: 39-40)

⇒尾関(2002)

- 「・・・共同性を基礎とする共生理念は、従来の社会主義思想の主流における共同社会の理念がともすれば同質化傾向を助長した面もあることを考えると、その批判的克服の延長にも位置づけられ、」(p.20)
- 「・・・人間は、そのヒューマン・ネイチャーとして本源的な共同性をもっており、人類史四〇〇万年の大半において共同性価値は人間文化と社会に大きな位置を占めてきたといえよう。・・・共同性を基礎におく共生、すなわち共同的共生の理念とは、人間の自然的本源性に根ざす共同性価値を根底におきつつ、近代の獲得物である個性(異質さ)価値を積極的に承認し、近代の形式主義を乗り越える仕方で実質的平等の実現をはかろうとする共生理念」(pp.24-25)である。

(4) Buchanan (1964: 217-218)のいう「共生学」

“Symbiotics is defined as the study of association between dissimilar organisms, and the connotation of the term is that the association is mutually beneficial to all parties. This conveys, more or less precisely, the idea that should be central to our discipline. It draws attention to a unique sort of relationship, that which involves the cooperative association of individuals, one with another, even when individual interests are different. It concentrates on Adam Smith’s “invisible hand,” which so few non-economists properly understand. As suggested above, important elements of the theory of choice remain in symbiotics.

• • • The uniquely symbiotic aspects of behavior, of human choice, arise only when Friday steps on the island, and Crusoe is forced into *association* with another human being. The fact of association requires that a wholly different, wholly new, sort of behavior take place, that of “exchange,” “trade,” or “agreement.” Crusoe may, of course, fail to recognize this new fact. He may treat Friday simply as a means to his own ends, as a part of “nature,” so to speak. If he does so, a “fight” ensures, and to the victor go the spoils. Symbiotics does not include the strategic choices that are present in such situations of pure conflict. On the other extreme, it does not include the choices that are involved in purely “integrative” systems, where the separate individual participants desire identical results.”

「共生学は、異種生物間の関係性の研究として定義されており、この用語の意味合いは、その関係性がすべての当事者にとって相互に有益であるということである。これは、おおむね正確に、私たちの学問[経済学]の中心となるべき考えを伝えている。それは、個人一人一人の利益が異なっているにもかかわらず、個人間の協力的な関係性を伴う、独特の種類の関係に光を当てることになる。・・・人間が選択する行動の独特の共生的側面は、フライデーが島に足を踏み入れクルーソーが他の人間との関係を余儀なくされるときにはじめて発生する。他者との関係が生ずるという事実は、それまでとは全く異なる、全く新しい種類の行動を必要とする。それが、『交換』、『取引』、または『協定』という行動である。」

(上記のBuchanan引用文青字部分:横山訳、[]部分:横山加筆)

(5) 共生の政策的意味づけ(目標としての「共生」)

- ・環境との共生: 環境政策目標
- ・国民国家における少数民族との共生: 文化政策目標
- ・外国人労働者との共生: 経済政策目標・労働政策目標
- ・障害者・高齢者・女性との共生: 社会福祉政策目標
- ・LGBTQ (Lesbian, Gay, Bisexual, Transgender, Queer/Questioning) との共生: 人権政策目標

⇒ここで考える必要があるのは、**主体**である。

1) 「**誰**」と<<誰>>との共生か？

2) 政策決定過程に係る主体は「**誰**」か？

⇒⇒“**Who** says **what** through which channel to whom with what effect?” (Norris et al., 1999: 9)

Norris, P., J. Curtice, D. Sanders, M. Scammell, and H. A. Semetko (1999), *On Message: Communicating the Campaign*, London: Sage.

4. 共生・共存・共感：外部性の視点から

○共存 (coexistence: 他者と共に在る状況):

互惠的關係・寄生的關係・競合的關係、孤立・孤独

○他者の行動を所与にしたとき、自分の行動をどのように選択すれば自分の福祉を高められるかを考えながら、他者と共に生きる。

⇒人は自分の福祉を高めることをめざし他者と共に生きている。自分の福祉水準は、他者の行動や福祉水準にも左右される。

⇒他者の存在が自分に何らかの影響を与えている状況下に置かれている。

⇒他者の存在がもたらす外部性(横山 2023a)

○外部性と外部性分析の汎用

個人 i の効用(満足) U_i は、自分自身の所得 Y_i だけではなく、他者 j の活動 X_j にも左右される。

- ・外部経済: 他者 j の活動 X_j が高くなると、自分の効用 U_i が高くなる。

$$U_i = f_i(Y_i, X_j); \quad \partial U_i / \partial Y_i > 0, \partial U_i / \partial X_j [\equiv U_{iXj}] > 0 \quad (1)$$

- ・外部不経済: 他者 j の活動 X_j が高くなると、自分の効用 U_i が低くなる。

$$U_i = f_i(Y_i, X_j); \quad \partial U_i / \partial Y_i > 0, \partial U_i / \partial X_j < 0 \quad (1)$$

- ・分配の外部性: 他者 j の所得 Y_j が高くなると、自分の効用 U_i が高くなる。

$$U_i = f_i(Y_i, Y_j); \quad \partial U_i / \partial Y_i > 0, \partial U_i / \partial Y_j > 0 \quad (2)$$

⇒Hochman, H. M. and J. D. Rodgers (1969), “Pareto Optimal Redistribution,” *American Economic Review*, 59(4): 542-557.

- ・相互的外部性: 個人 i と個人 j の2人が、相互に影響を与え合う。

$$U_i = f_i(X_i, X_j) \text{ and } U_j = f_j(X_j, X_i); \quad (3) \quad (4)$$

$$\textcircled{1} U_{iXj} > 0 \text{ and } U_{jXi} > 0, \quad \textcircled{2} U_{iXj} > 0 \text{ and } U_{jXi} < 0,$$

$$\textcircled{3} U_{iXj} < 0 \text{ and } U_{jXi} > 0, \quad \textcircled{4} U_{iXj} < 0 \text{ and } U_{jXi} < 0$$

・他者の存在がもたらす相互的外部性:

相互的外部性の定式化(3)式や(4)式で他者の政治活動・社会活動・文化活動 Z_h ($h = i, j$) や他者の人間存在そのもの H ($H = I, J$) が各々の効用関数に入ることが考えられる。

$$U_i = f_i(Z_i, Z_j) \text{ and } U_j = f_j(Z_j, Z_i) \quad (5)$$

$$U_i = f_i(I, J) \text{ and } U_j = f_j(J, I) \quad (6)$$

この(5)式と(6)式で、他者の活動 Z_h ($h = i, j$) や他者の人間存在そのもの H ($H = I, J$) から得られる限界効用の符号の組み合わせ

【他者の活動については】

$$\textcircled{1} U_{izj} > 0 \text{ and } U_{jzi} > 0, \quad \textcircled{2} U_{izj} > 0 \text{ and } U_{jzi} < 0,$$

$$\textcircled{3} U_{izj} < 0 \text{ and } U_{jzi} > 0, \quad \textcircled{4} U_{izj} < 0 \text{ and } U_{jzi} < 0$$

【他者の人間存在そのものについては】

$$\textcircled{1} U_{iJ} > 0 \text{ and } U_{jI} > 0, \quad \textcircled{2} U_{iJ} > 0 \text{ and } U_{jI} < 0,$$

$$\textcircled{3} U_{iJ} < 0 \text{ and } U_{jI} > 0, \quad \textcircled{4} U_{iJ} < 0 \text{ and } U_{jI} < 0$$

他者の存在がもたらす相互的外部性を(5)式と(6)式で考えると、

①のケースは互恵的關係での共存

②と③のケースは寄生的關係での共存

④のケースは競合的關係での共存

共存とは他者と共に在る状況だけを示し、共存の關係性は互恵的關係もあれば寄生的關係もあれば競合的關係もある。

他者の存在がもたらす外部性とりわけ相互的外部性が生じている状況こそ、人間が他者の存在を前提に生活している場を特徴づけている。

そのとき、共生を①のケースで示される互恵的關係での共存として理解するのか、他のケースとりわけ④のケースで示される競合的關係での共存も含めて、共生(他者と共に生きる)と理解するかは、共生を論ずる者によって異なる。

- ・効用の相互依存性(+): 他者 j の効用 U_j が高く[低く]なると、自分(個人 i)の効用 U_i が高く[低く]なる。

$$U_i = f_i(Y_i, U_j); \quad \partial U_i / \partial Y_i > 0, \quad \partial U_i / \partial U_j [\equiv U_{iUj}] > 0$$

$$\text{ケース1: } U_j = f_j(Y_i); \quad dU_j / dY_j > 0$$

$$\text{ケース2: } U_j = f_j(Y_j, U_i); \quad \partial U_j / \partial Y_j > 0, \quad \partial U_j / \partial U_i [\equiv U_{jUi}] > 0$$

⇒渡辺(2011)の分類では、正の共感[負の共感]

- ・効用の相互依存性(-): 他者 j の効用 U_j が高く[低く]なると、自分(個人 i)の効用 U_i が低く[高く]なる。

$$U_i = f_i(Y_i, U_j); \quad \partial U_i / \partial Y_i > 0, \quad \partial U_i / \partial U_j [\equiv U_{iUj}] < 0$$

$$\text{ケース1: } U_j = f_j(Y_i); \quad dU_j / dY_j > 0$$

$$\text{ケース2: } U_j = f_j(Y_j, U_i); \quad \partial U_j / \partial Y_j > 0, \quad \partial U_j / \partial U_i [\equiv U_{jUi}] < 0$$

⇒渡辺(2011)の分類では、逆共感[シャーデンフロイデ(Schadenfreude)]

【注意】

渡辺(2011)のマトリックの「observer」は自分(個人 i)で、「others」は他者 j である。自分が幸せ[不幸]になったとき、他者はどう感じるのかについては、明示されていない。

渡辺(2011)の「共感の分類」

		observer (観察者)	
		happy (幸福)	unhappy (不幸)
others (他者)	happy (幸福)	Positive empathy 正の共感	Reversed empathy 逆共感
	unhappy (不幸)	Schadenfreude (シャーデンフロイデ)	Negative empathy 負の共感

出所: 渡辺茂(2011)「動物の共感: 比較認知科学からのアプローチ」
 (『認知神経科学』13(1): 89-95), p.90 表1.「共感の分類」に
 ()部分を加筆。

○ Adam Smith の共感 (sympathy)

“Pity and compassion are words appropriated to signify our fellow-feeling with the sorrow of others. Sympathy, though its meaning was, perhaps, originally the same, may now, however, without much impropriety, be made use of to denote our fellow-feeling with any passion whatever.”

出所: Smith、A. (2002[1759]), *The Theory of Moral Sentiments*, ed. by Knud Haakonssen, Cambridge: Cambridge University Press, eBook Academic Collection (EBSCOhost) –Worldwide, p.13.

「哀れみと同情は、他の人びとの悲哀にたいするわれわれの同胞感情をあらわすのに、あてられたことばである。同感は、おそらく本源的には意味がおなじであっただろうが、しかしいまでは、どんな情念にたいする同胞感情であっても、われわれの同胞感情を示すのに、大きな不適宜性なしに用いることができる。」

出所：アダム・スミス著／水田洋訳(1973)『道徳感情論』筑摩書房 p.8

「哀れみや同情は、我々が他者の悲哀に対して抱く一体感を示すのに適した言葉である。共感^{シンパシー}という言葉は、おそらく元来同じ意味だったが、今日では、何らかの激情に対する一体感を表すために用いられる、と言っても過言ではないだろう。」

出所：アダム・スミス／高哲男訳(2013)『道徳感情論』講談社(学術文庫) p. 33

効用の相互依存性(共感・共生・共存)

個人*i*の限界効用 U_{iUj}

+

—

個人*j*の限界効用 U_{jUi}

+

—

① 共感	② 善き人と 悪しき人
② 善き人と 悪しき人	④ 敵対

(5) 竹本(2020)の「共感と共生」

「さて社会は、個人のたんなる集合でもなく、かといって先験的に実体として在るものでもなく、多層的で多角的な人間関係の総体としてみなしうるものだとするれば、その社会で生きる人間は社会のなかで、生存のために互いに『援助』を求め合うと同時に、互いに『傷つけ合う』という矛盾した境遇に立たされる。・・・相互的な援助と侵害あるいは友好と敵対は、人間が社会的存在であることの徴であり、人はこうした両面性のなかで自分を変え、他人との関係も組み直しながら生きている・・・社会で生きようとする人間には、・・・衆として繋がる社会性と衆には回収されない個性性、あるいは連帯と孤独との存在の矛盾がある。」(pp. 17-18)

「・・・共感は二面的な性質を有している。すなわち共感は、感情と行動の交流によって人びとを結合させる契機となると同時に、或る人びとに強く共感することでその他の人びとを無視ないし軽視するという偏りをもち、それによって貧者や弱者を社会的に孤立させる契機ともなる。」(p.29)

出所: 竹本洋(2020)『スミスの倫理:『道徳感情論』を読む』名古屋
大学出版会

(8)Walzer (1983:31) のいう「成員と部外者」

“The primary good that we distribute to one another is membership in some human community. And what we do with regard to membership structures all our other distributive choice: it determines with whom we make those choices, from whom we require obedience and collect taxes, to whom we allocate goods and services.”

出所：Walzer, M. (1983), *Spheres of Justice: A Defense of Pluralism and Equality*, Oxford : Robertson. 山口晃訳(1999)『正義の領分：多元性と平等の擁護』而立書房

「私たちがお互いの間で配分する第一の財は、或る共同体の中での成員資格である。そして、私たちが成員資格に関して行うことが、私たちの他のすべての[分配]をめぐる選択に構造を与える。それが、私たちはだれとその選択を行うのか、だれからの服従が必要で、だれから税を集めるのか、だれに私たちは財とサービスを[配分]するのか、を決定する。」(邦訳:61-62、[]部分は横山修文)

⇒国(政治的共同体)・学校・会社・隣人関係・クラブ・家族などの成員資格を決める基準は何か。入退出自由か。

⇒成員資格を持つ者は、国籍(住民票)を有する人か、参政権を持つ人か、当該社会で暮らす人か。

⇒横山(2013b)

表1. 社会的ジレンマの状況

		個人 j	
		生産（協力）	攻撃（非協力）
個人 i	生産（協力）	I 3, 3	II 1, 4
	攻撃（非協力）	III 4, 1	IV 2, 2

この表1の各セルは、効用関数に他者の諸活動や存在そのものが引数として入った「他者の存在がもたらす相互的外部性」に関する考察のときの①～④に当てはめると、セルIが①、セルIIが③、セルIIIが②、セルIVが④に相当するともいえる。

個人 i が成員で、個人 j が非成員であるときを考察する。

表2. サマリタン・ジレンマ

		パラサイト	
		働く	働かない
サマリタン	助けない	I 2, 2	II 1, 1
	助ける	III 4, 3	IV 3, 4

出所：Buchanan (1975: 72) 図 1 に基づき一部表記を変更のうえ筆者作成。原典ではサマリタンをA、パラサイトをB、それぞれの選択肢を1と2とした利得表記である。

成員(サマリタン)である個人*i*の利得は、生産(協力)や援助や協定遵守といったナイスな行動や向社会的行動(pro-social activities)をとることで得られる満足まで考慮した利得(非帰結的価値まで反映した帰結主義的利得)を示す。

サマリタンからすれば、パラサイトとの出会いは偶然だけでなく、外形的に助けを必要としている他者との出会いを求め、手を差し伸べて助けることで幸せを感じるかもしれない。それは、サマリタンからしても他者(パラサイト)の存在がもたらす外部性(プラスの外部性)の存在を意味する。こうしたサマリタンからすると、たとえ他者が自分の望むような活動をとらなくとも、また他者が自分の望むような人間でなくとも、他者と共に生きることで他者の存在がもたらす外部性(プラスの外部性)を得ることができるのである。

5. 再分配の私的動機付け*

(1) 立憲段階

仮説的な「**無知のヴェール**」に包まれた立憲段階での個人の**危険回避的行動を前提**にするならば、すべての個人が立憲後に生起する最悪の事態（例えば不慮の事故で稼得能力を喪失し助けてくれる家族や隣人もなく生計を維持できない事態）に自分が陥った場合を考え、最低限度の生活保障や所得保障を備えた社会保障制度を立憲後に用意しておくことに対して、**立憲段階において全員一致で合意する**。立憲後の政府の再分配政策に対する立憲的な動機付けは、自分も陥る可能性がある最悪の事態を想定した危険回避的な個人が自己利益を追求するという私的動機付けで説明できる。

(2) 立憲後段階

①効用の相互依存性

先述の「外部性と外部性分析の汎用」の(1)(2)式

②移転行為の効用

サマリタンとしての非帰結的利得

*横山(2018: 24-28)参照

個人 i の効用(満足) U_i は、自分自身の所得 Y_i だけではなく、貧しい他者 j に自分が手を差し伸べ贈与を与えたという移転行為 T_i そのものから効用を得る。

$$U_i = f_i(Y_i, T_i); \quad \partial U_i / \partial Y_i > 0, \partial U_i / \partial T_i > 0 \quad (7)$$

③ 慈善家という評判の効用

個人 i は、貧しい他者 j に手を差し伸べ一定の贈与額 B_i を与えた慈善家(良い人)という評判 $R(\cdot)$ を得ることから効用を得る。

$$U_i = f_i(Y_i, R(B_i, B_{-i})) \quad (8)$$

④ 社会全体の所得分配状態への選好

個人 i は、所得の平等度など分配状態 $S = S(Y_1, Y_2, \dots, Y_n)$ への選好を持ち、所得分配状態 S は純粋公共財を意味する。

$$U_i = f_i(Y_i, S) \quad (9)$$

④ 再分配政策の個人的な帰着利得への選好

政府の再分配政策 G に関する個人 i に帰着する利害得失すなわち帰着利得 G_i への選好を持つ。

$$U_i = f_i(Y_i, G_i) \quad (10) \quad 39$$

6. おわりに

外部性を考えることで、他者と共に「より良く」生きることのできる人間社会のあり方を検討した。

- ⇒他者と共に生きることを大前提に他者との関わり方を考える個人を出発点にした。他者と共に生きる社会における自然・政治・経済・技術・思想などの人を取り巻く諸環境がどのようになれば、他者と共に生きる社会で人が各々の目標を実現できるかを検討する枠組みを示した。
- ⇒「より良く」生きるときの「より良く」は人によって異なり、人が一人一人違うという差異性を前提にしたうえで考察する必要性を示唆した。
- ⇒人と社会の多様性、社会の形成・維持、社会構成員の選択を考察することが重要になる。